



2020年10月



9月下旬となると、日が暮れるのも早くなってきましたし、だいぶ暑さも緩和されてきましたね。読書の秋・食欲の秋・芸術の秋などといわれるように、秋は感性を豊かにしてくれます。なんととっても気温がほどよく過ごしやすい季節です。みなさんも、秋を有意義に過ごしてくださいね。

今回ご紹介する本は『歌う鳥のキモチ』石塚徹著 山と溪谷社 2017 です。この本を読んでいると、鳥たちは、衝動的な気持ちの表れでいろんな声を出すということがわかります。鳥の声には大きく分けて二種類あるとされています。それは、「さえずり」と「地鳴き」です。「さえずり」はいわゆる歌で、オスだけが出す種類が多く、“花嫁募集”や“なわばり宣言”の意味をもつそうです。一方の「地鳴き」は普段の声のため、オスメス関係なく一年中通して聞くことができるそうです。

鳥の歌がなわばりであることを科学的に証明した実験は、特に印象に残りました。1970年代にイギリスの森で、なわばりを張る8羽全てを捕獲し、かわりにスピーカーから歌を流すという実験が行われたのです。スピーカーからシジュウカラの歌が流れているエリアは、侵入されにくかったのです。しかも、何曲もレパートリーがあるほど防衛効果は高まるというものでした。

もう一つ興味深いものがあります。著者が観察した、子育て中の4つがいのクロツグミのオス4羽全てが、ヒナに餌を運んでくる直前直後に巣の近くで小声を歌うという行動です。メスが巣でヒナを抱いている時ほど歌は多く、巣の近くでオスが歌うとメスは巣を離れやすいのです。子育て中のメスも餌を求めて巣を離れる際、このオスの小声を目安に巣を離れている。しかし、他のオスではその傾向が見られなかったため、“巣への接近が自分の刺激になり、一定の緊張感をもたらして、小生の歌が「出てしまう」のである。”と著者は述べています。海外の文献でも、メキシココマツグミが餌を与えた後に小生で歌う・クロウタドリが餌を与えた際に歌ってヒナに餌乞いを促す・ワキアカツグミが歌でヒナを巣立ちへ導くなどの記述があるそうで、機能を検証した研究ではないが、これらの行動は珍しくないのだそうです。

鳥社会には共存するための暗黙のルールがあることに気付かされました。親鳥がヒナを思い、親子の絆も感じることができます。この本を読んだ後は、鳥の声におもわず耳を傾けたくなくなってしまうかもしれません。花鳥風月という素敵な言葉がありますが、鳥の場合は視覚だけでなく、聴覚でも楽しむのはいかがでしょうか。

